

「保育内容環境」についての再検討

～モデルカリキュラムをふまえて～

中島 寿子

A Study for reconsideration on Instruction Method of Contents
in Early Childhood Care and Education(Environment):Based on Model Curriculum

NAKASHIMA Hisako

(Received August 3, 2017)

キーワード：保育内容環境、幼稚園教員養成、幼稚園教育要領改訂、モデルカリキュラム

はじめに

2017年3月に新しい幼稚園教育要領が告示された。また、検討中の教職課程コアカリキュラムにそったモデルカリキュラムも同時期に提示された（保育教諭養成課程研究会，2017）。

本稿では、筆者が現在担当している「保育内容環境」の授業内容について振り返り、モデルカリキュラムもふまえながら再検討し、改善点について考えていきたい。

1. 研究の目的

「保育内容環境」の授業内容について振り返り、モデルカリキュラムをふまえて幼稚園教員を養成するための科目として再検討し、改善点について考える。

2. 研究の方法

取り上げる授業科目は2017年度「保育内容環境」（2年前期，2単位）である。一般目標と到達目標、授業の流れは表1・表2の通りである。履修者は、幼児教育コース11名（必修）、他コース6名（幼免取得者は選択必修）、計17名であった。『幼稚園教育要領解説』（文部科学省，2008）を教科書とした。模擬保育も行なうことができるように、机が可動式の教室を使用した。

この授業について、配布したレジュメ・資料、学生の発言についての記録、授業内レポート^{註1)}、教材研究レポートや模擬保育の記録等をもとにその内容をまとめる。そして、保育内容「環境」の指導法のモデルカリキュラムをふまえてその内容について再検討し、改善点について考える。

3. 結果と考察

3-1 「森の幼稚園」の実践に学ぶ

第1回オリエンテーション後、第2回から第4回は「森の幼稚園」の実践を取り上げ、子どもにとっての自然の意味について考えることから始めた。第2回前半は事前学習資料として配布した『センス・オブ・ワンダー』（レイチェル・カーソン，上遠訳，1996）からの抜粋を一緒に読み、子どもたちに「センス・オブ・ワンダー」をどのように育てていくかを今後の授業の中で考えてほしいと伝えた。「保育内容環境」のねらいと内容についても一緒に確認した。後半は「森のようちえんピッコロ」の映像記録DVD『見守ること～森のようちえんの日』（小学館，2015）を視聴した。この映像記録は、森を拠点としている自主保育

表1 2017年度「保育内容環境」の一般目標と到達目標

一般目標	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの身近な環境とのかかわりの育ちについて理解することができるようになる。 ・「保育内容環境」の基本的な考え方について、幼稚園の具体的事例と関連させて理解することができるようになる。
到達目標	知識・理解の観点 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの身近な環境とのかかわりの育ちについて具体的に述べることができる。 ・「保育内容環境」の基本的な考え方について具体的に述べることができる。
	思考・判断の観点 <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な事例をもとに、「保育内容環境」について自分の考えを述べることができる。
	関心・意欲の観点 <ul style="list-style-type: none"> ・討議において積極的に発言することができる。 ・課題に意欲的に取り組むことができる。
	態度の観点 <ul style="list-style-type: none"> ・他者の話を傾聴しながら、主体的に授業に参加することができる。
	技能・表現の観点 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや課題に取り組んだ成果について、他者にわかりやすく発表することができる。 ・自分の考えをレポートにわかりやすくまとめることができる。

表2 2017年度「保育内容環境」の授業の流れ

回	月日	テーマ	内容
1	4/13	オリエンテーション	シラバスをもとにしたオリエンテーション
2	4/20	保育内容「環境」とは「森の幼稚園」の実践に学ぶ（1）	保育内容「環境」のねらいと内容／自然とのかかわり（1）森の幼稚園ピッコロの実践をもとに
3	4/27	「森の幼稚園」の実践に学ぶ（2）	自然とのかかわり（2）東京都公立幼稚園の実践をもとに
4	5/ 8	「森の幼稚園」の実践に学ぶ（3）	レポートをもとにした発表と討議
5	5/11	事例をもとに「保育内容環境」について考える（1）	動植物とのかかわり
6	5/18	教材研究Ⅰ実践発表	教材研究Ⅰをもとにした模擬保育と討議
7	5/25	事例をもとに「保育内容環境」について考える（2）	物や遊具とのかかわり
8	6/ 1	事例をもとに「保育内容環境」について考える（3） 保育参加に向けて（1）	数量・図形・標識・文字等とのかかわり 保育参加事前指導（1）
9	6/ 8	保育参加に向けて（2）	保育参加事前指導（2）
10	6/15	保育参加（1）	附属幼稚園における第1回保育参加とレポート作成
11	6/22	保育参加（2）	附属幼稚園における第2回保育参加とレポート作成
12	6/29	保育参加体験をもとに「保育内容環境」について考える（1）	第1回保育参加レポートをもとにした報告と討議
13	7/ 6	保育参加体験をもとに「保育内容環境」について考える（2）	第2回保育参加レポートをもとにした報告と討議
14	7/20	今後の幼稚園教育に求められるもの	幼稚園教育要領改訂と幼稚園教諭に求められる資質・能力
15	7/27	教材研究Ⅱ実践発表	教材研究Ⅱをもとにした模擬保育と討議
16	8/ 3	まとめ	これまでの授業の振り返りとまとめ

の園の子どもたちと保育者の姿や、子どもにとっての自然の意味や保育者としての思い・考えについて語る代表者の姿が記録されているため、教材とした。レジュメには映像記録のポイントとなる点を挙げ、数回に分けて視聴し、感じたこと考えたことを数名が語った後、続きを視聴するようにした。その後、子どもにとっての自然の意味について、「保育内容環境」の内容の取扱（2）も取り上げて考えた。

第3回は、東京の公立幼稚園の映像記録DVD『森の幼稚園』（映像情報センター）を視聴した。この映像記録は、地域に大きな公園があることを生かし、一年を通して子どもたちと公園に出かける公立幼稚園の実践が記録されているため、教材とした。事前学習として、当時の保育者の保育観を学ぶことができる資料（宮里，2009，2010）を読むことを課した。レジュメ作成と映像視聴の流れは、第2回と同じである。

第2回・第3回の授業内レポートからの抜粋を表3・表4にまとめた。「森のようちえんピッコロ」の実践は、学生たちにとって初めて出会う保育であり、自然の中で子どもたちが自分で考えて行動し、自分の身を自分で守る術を身につけていることに驚き、代表者が語る「子どもを信じて見守る保育」について学んだことを記述する学生が多かった。公立幼稚園については、多くの学生が本学独自のプログラム「保育ボランティア」で地域の公立幼稚園に行った体験があるため、身近に感じたようであった。また、地域の専門家や保護者とも連携し、一年間の四季の変化を感じながら子どもたちが様々な体験ができる保育から学んだことを記述する学生が多かった。

表3 第2回授業内レポートからの抜粋

森のようちえんピッコロの実践を見て	今の自分の感覚だと危険だと思って大人たちが制御している状況でも、子ども自身で解決して行動しているところに驚いた。保育者の意思や考えていることによって、保育の方法はかなり変わってくるということが分かった。
	大人の考えをただ伝えるのではなく、子ども自身が「なんで（木から）落ちたのか」「どうしたらよかったのか」「これからはどうすべきか」などを考えたり、話し合ったりする方が子どもたちに強く残るのではないかと思った。
	大人と子ども間だけでなく、子ども同士でも否定的な発言や「それは違う」というような表現が少ないと思った。子どもたち一人一人をしっかり肯定して受け入れることが大切だと思ったし、自分も大切にしていきたい。

表4 第3回授業内レポートからの抜粋

保育者の姿勢	保育者が自然とのふれあい方や遊びの手本を示すことがとても良いことだと思ったが、その際には子どもの安全を確保しなければいけない。自分が手本を見せながら周囲に気を配ることはとても難しいと感じた。
「自分で」する体験	森で遊んでいる子どもたちが先生に「どこにあったの？」と聞かれ、その場所に連れて行っている場面があった。自分で見つけたからこそ、その場所をしっかり覚えていて、そうやって子どもたちの頭の中にマップができていくのではないかと思った。
生き物や人のかかわりの育ち	子どもたちがいろんな虫を手でつかまえていて、森の自然に親しむことで、生き物に興味を持ったり、生き物と一緒に生きているということを実感できると思った。 自然という場で共通の興味や話題を持たせる（持たざるを得なくなる）状況をつくるのは、「自然な友だちづくり」としても良いことだと感じた。
一日や一年の中での違いを感じる	一年間、四季を通してその森で遊ぶことで、森の様々な変化に気づくことができる。様々な変化を知ることを通して、子どもはいろいろなことを体験することができるとともに、いろいろなことを考えることができると思う。 一日でも昼と夜というように違う経験ができるのだということをビデオをみて気づいた。

表5 第4回授業内レポートからの抜粋

いろんな人の発表を聞いて	自分ではできなかった発見や気づきが多かったので、様々な意見を共有することは大切だと改めて感じた。
	同じようなことに気づいていることでも、そう思った根拠や考え方等が一人一人微妙に違って、参考になることが多かった。
自分の考えを伝えること	ただレポートを読むのではなく、伝えたいことをしっかり伝えられるように話したいと思っていたが、うまく話せなかった。
	人の前に立って自分の意見を述べることの難しさを改めて感じた。これから必要なことなので努力しようと思う。

二つの実践をもとに、子どもと自然とのかかわりについて自分の考えをまとめるレポートも課した。自分の考えを伝え合う体験もできるように、第4回はこのレポートを印刷・冊子化して配布し、レポートをもとにした報告を行なった。報告を聞いての感想等も、一人1回は発言するようにした。この回の授業内レポートには、報告内容だけでなく、自分の考えを話すこと伝えることについての記述もあった（表5参照）。

3-2 事例をもとに「保育内容環境」について考える

第5回・第7回・第8回では、幼稚園における具体的な事例をもとに「保育内容環境」について考えた。事例と一緒に読み、感じたこと考えたことを発言し合い、特に関連する「保育内容環境」の内容も確認した。この回の授業内レポートからの抜粋を表6にまとめた。紙幅の都合より、井口（2004）の事例についての記述のみ取り上げている。

子どもたちの具体的な姿をもとに考えたことで、自分自身の幼児期の体験や保育ボランティアで出会った子どもの姿を挙げながら、また、「自分だったら」「子どもたちにとっては」という視点から「保育内容環境」について考えようとする記述が増えた。そのように、一つ一つの事例を自分自身の体験と結び付けたり、自分のこととして考えていくことの大切さについても、翌週の冒頭に授業内レポートの抜粋を紹介しながら伝えていった。

表6 第5回・第6回・第8回授業内レポートからの抜粋

<p>「白兔の死」を読んで： 白兔が死んだ時の事例</p>	<p>自分の通っていた保育園でも兎を2匹飼っていて、そのうちの1匹が死んでしまった時にお墓を作って花を供えたりしていた。身近な動物の死は、生死の概念を理解する良い機会だと思った。</p>
<p>「アリとTくん」を読んで： 巣穴を出入りするアリをみていた後、突然穴を踏みつけて壊してしまったTくんの事例</p>	<p>私だったら「アリさんがかわいそうだよ」とただ否定するだけだったと思う。この記述を見て、確かに興味があってどうなるのかという探究心があるからこそその行動だと思った。子どもたちの行動の結果だけを見るのではなく、その行動に至った過程や子どもの思いを見逃さないようにしなければならないと感じた。</p> <p>私たちににとっては残酷だと感じることで、子どもたちにとっては今しかできない大切な体験なのだと思う。しかしもしも目の前で「それはおかしい」と思うようなことを子どもたちがしていたら、どこからどのような言い方で止めたらいいのかと思い、難しい判断だと思った。</p>
<p>「道具」を読んで： 様々な道具を使う子どもたちの事例</p>	<p>道具との関わりについてはあまり考えたことがなかった。はさみやホッチキスなど使い方を間違えると危険なものをはじめ、子どもの身のまわりにはたくさんの道具であふれている。子どもがそれらとどのように関わるようにするか考えたいと思った。</p>
<p>「数える」を読んで： ブランコで「10数えたら交替」で自分が乗る時はゆっくり、友達の時はずり数える事例</p>	<p>保育ボランティアであったことを思い出した。おんぶをしてほしい子どもが何人かいたので、「10ずつね」と言うのと「少ない」と言うので、「じゃあ30ずつね」と私が何気なく言うと、子どもたちは納得した。それで一人目の子どもと一緒に数えながらおぶっていると、おぶっている子どもは少しだけゆっくり数えて、周りの子どもの方が少し速く数えていた。その時私は数がどんどん数えられる子とそうではない子の違いかなとぐらいいか思っていなかったが、今回事例を読んで、そういうとらえ方もあるのだと思った。</p>
<p>「積む」を読んで： 積木やコップ等を積んで遊ぶ子どもたちの事例</p>	<p>積んだものを自分の手で壊すという動きについて、ただその様子を楽しんでいるだけではなく、その行動から得られる積木の音や動き、驚きなど、様々なことを味わうことができ、それらを含めて子どもたちは色々な楽しさや感情を味わうことができることを改めて学んだ。</p> <p>保育ボランティアでの出来事を思い出した。ある男の子が積木を高く高く積み上げていた。「タワー作ってるの」と自信満々な表情で教えてくれたその子は、いつの間にか自分の身長をこえる程高く積んでいた。もう手が届かなくなりそうとなった時、どうするのかなと見ていると、大きなやわらか積木を高く積み上げた小さい積木の横に置き、自分の足場を作っていた。自分の「もっと高く積みたいたいでも届かない→どうしたら届くだろう」という気持ちを自分の中で解決して行動していると思い、感心した。</p>

3-3 教材研究をもとにした模擬保育(1)

教材研究Iとして生活の中で身近な自然について観察し、教材研究することを課した(表7参照)。保育の構想を保育案として具体的に書き表す学習はまだ行っていないため、教材研究レポートには「子どもに伝えたいこと」「伝えたい理由」「どのように伝えるか」をまとめるようにした。

第6回は教材研究の成果を模擬保育として発表する時間とした^{注2)}。「保育者」となる学生の前に「子ども」となる学生の椅子を扇形に二列に配置して実施した。始める前には、「保育者」「子ども」いずれの立場にもなってみながら「保育内容について子どもの側から考える」ことを大切にしてほしいと伝えた。

「子どもに伝えたいこと」としては、「ナズナの実を引っ張り揺らすと音が鳴ること」「シロツメクサの花のつくりと葉、冠の作り方」等の自然物を用いた遊びや、「アリの巣の中は深くて大きな部屋に分かれていること」「オタマジャクシは大きくなったらカエルになること」等の小動物の生態について取り上げた学生が多かった。また、初めての模擬保育の体験だったことに加えて、課題に「話をする」という表現を用いたためか、写真や自分が描いた絵を用いて言葉で説明しようとする学生が多かった。「保育者」の学生が実際にカラスノエンドウを持って来て笛になることを紹介したり、笹の葉を持って来て笹舟を作る遊びを紹介した際には、「子ども」の学生たちも一緒に楽しみながら作る姿が見られ、「実物」に触れることの大切さを体験を通して実感したようであった。

この体験をもとに、一人一人の発表について保育内容として「よかった点」「ここを改善するとさらによくなる点」をコメントカード^{注3)}に記入して提出し、翌週とりまとめて本人に渡した。また、授業内レポー

表7 教材研究I課題の概要

課題	身近な自然について観察し、動植物についての教材研究をする。
レポート	以下の内容をまとめる。1.「子どもに伝えたいこと」2.伝えたい理由(100字程度)3.どのように伝えるか(200字程度)
模擬保育	教材研究の成果をもとに動植物についての話をする(発表者が「保育者」他の学生が「子ども」になり実践発表。2分程度)

表8 第7回授業内レポートからの抜粋

「子ども」 になって みて	子どもは実物に触れることが一番の学びになると感じた。人から言われて発見し、理解するよりも、自分で発見し、理解した方が学びの質が高まると思った。
	絵や写真、実物を用いた話の方がより想像しやすく、興味を持ちやすいと思った。実際に体験できることを取り入れることで、より楽しめることが分かった。子どもの反応に対する受けこたえも大切だと気づいた。
「保育者」 になって みて	幼児に対する言葉選びが難しいと思った。
	「こんなことを知ってほしい」という思いが強すぎて、「〇〇に見えるよね?」「〇〇なんだよ」とすぐ答えを出してしまっていたり、子どもたちの自由な意見への反応が薄かったりして、子どもが主体的に活動できる印象はあまりなかった。
	問かけると予想外の回答があり、言葉につまることがあるので、対応ができるようにしたいと思った。
	保育者の立場として、活動のテーマやねらい、流れの構成を考えるむずかしさを改めて実感した。

トに具体的に保育を構想することの難しさについて触れた記述(表8参照)があったため、保育案の様式例について板書を用いて説明し、「幼児の実態を把握する→保育者としての思い・願い・援助の方向性について考える→この日の保育について具体的に構想する(ねらい・予想される子どもの姿・環境構成・援助)」という筋道で考えていくこと、今後の授業で具体的に学んでいくことを確認した。

3-4 附属幼稚園における保育参加をもとに「保育内容環境」について考える

2年前期は同じ曜日の1・2時限に「保育内容環境」、3・4時限に「保育内容人間関係」を開講し、2科目とも履修している学生は附属幼稚園での保育参加を体験できるようにしている。2017年度も附属幼稚園と日程調整を行ない、第10回・第11回授業として保育参加の機会を設けた^{注4)}。

保育参加のための事前指導を第8回・第9回で行なった。その概要を表9にまとめた。

附属幼稚園は、幼児教育コースの学生も1年前期に保育環境見学をしたのみで、他の学生にとっては初めての園であるため、第1回はまず観察を中心とした保育参加を行なった。始めに当日の流れについて再確認をし、副園長先生からオリエンテーションをしていただいた。この時期の子どもたちの様子について具体例を交えたお話を聞き、あたたかく見守る感じでいけばよいと助言を受けたことで、学生たちも少し安心した様子だった。

子どもたちがすきな遊びに取り組み始めた頃から保育参加を行なった。どの学生も最初はぎこちなかったが、子どもたちの遊んでいる様子を見ているうちに次第に緊張もとけ、興味のある遊びを見守ろうと努めていた。保育参加後は、短時間だが自分の体験したことを報告し合う時間をもった。

表9 保育参加事前指導の概要

目的	第1回 幼稚園生活を観察し、保育内容について学ぶ。 第2回 子どもともかかわりながら、保育内容について学ぶ。
附属幼稚園の保育	資料 「教育課程・指導計画」「環境図」「さくらんぼ(園だより)」「のうじょうだより」No.1・2(平成29年4・5月) ○教育目標 ○各学年の目標 ○生活時間(一日の流れ) ○年間の主な行事 ○保育参加の頃の園生活
保育参加の方法	資料 附属幼稚園『保育参加ガイド』より ○一日の流れとかかわり方 ○遊び・活動への入り方、子どもへのかかわり方 ○片づけの参加の仕方 等
保育参加の流れ	第1回 6月15日(木) 第2回 6月22日(木) 8:20~ オリエンテーション ・講話:副園長先生(この時期の園生活、保育参加の仕方、留意事項等) ・連絡・確認等:大学教員 9:30~ 保育参加 ・配属クラスに分かれて行なう(5クラスに分かれ、同じクラスに2回入る) 11:00~11:15 振り返り ・副園長先生・大学教員
レポート課題	第1回:保育参加で学んだことを保育内容「人間関係」「環境」の視点からまとめる。(40字×40行 各1枚) 第2回:保育参加の中で特に印象に残った出来事をまとめ、その出来事について感じたこと考えたこともまとめる。(40字×40行 2枚) ※いずれも、授業で学んだこともふまえてまとめる。 ※保育環境・子どもや保育者の姿等については、読み手に伝わるように具体的かつ簡潔にまとめる。 ※学んだこと、感じたこと、考えたことについて、自分なりの言葉で書く。

第2回は始めに数名が第1回の体験から学んだことを副園長先生に報告した。副園長先生からは、学生が報告した子どもたちの気持ちや考え、これまでの経験等についての考察をもとに、保育の中で大切にしていることについて話をいただいた。その後、第1回と同じクラスに分かれ、第2回は子どもたちともかわりながら保育参加を行なった。保育参加後は、また短時間だが自分の体験したことを報告し合う時間をもった。

学生が保育参加をしている間は、2回とも学生の様子や子どもたちの遊びについて写真記録をとり、保育参加後の振り返りのためのスライドを作成した。提出されたレポートも、印刷・冊子化して配布した。その際には、子どもの姿が記録されているため、個人情報管理には十分配慮するように確認した。

第12回・第13回は、保育参加体験を報告し合う時間をもった。子どもたちと学生の様子をまとめたスライドを一緒に見た後、レポートをもとに自分の体験を報告し合った。該当場面がスライドにあれば、その場面を再度一緒に見ながら報告できるようにした。

各回の授業内レポートからの抜粋を表10・表11にまとめた。2回とも、他の学生の報告から学んだことや同じクラスで保育参加をしても、人によって視点が違うことについて記述する学生が多かった。

表10 第12回授業内レポートからの抜粋（第1回保育参加レポートをもとにした報告と討議で学んだこと）

子どもの感じ方、考え方	砂場にバケツで水を運ぶ話や、SLを体で表現する話を聞き、大人は頭で考えて行動することが多いけれど、子どもは自分が体で感じたことを通して、遊び方を工夫したり、広げていったりするのだなと思った。
環境構成 ・四季の変化や動植物を身近に感じられる ・知りたい試したい思いを実現できる ・子どもの発想や興味、自分なりの工夫を大切にしている	どのクラスにも四季を感じたり動植物を身近に感じられるような環境が作られているように感じた。 子どもが何かを使いたい、これを調べたいと思ったときに、それを満たすことのできる環境を整えておくことが大切だと考えた。そのために、子どもたちがどんなことに興味をもっているのか、どんな遊びをしていて、それがどのように展開していきそうなのかを分かっておく必要があると考えた。 教材研究Iで自然に関することについて模擬保育を行なったが、保育者が子どもに言葉で教えるだけが子どもに興味をもたせるための手段ではないと思った。保育室内のこのような環境は、保育者の伝えたいことであると同時に子どもの興味に応えるものであるということもわかった。幼稚園の中の学びや自分の体験や園の外のことと結びつけるための一つの材料にもなると思った。 子どもたちの自由な発想や、「あれやりたい」「これが知りたい」という興味を大切にしていると感じた。ごっこ遊びやお店屋さんなど、何かの遊びをする時に使われるものは、紙、発砲スチロール、牛乳パックなど、身近にあるものを使って子どもたちが作ったものであることが多いと思った。これは、いろいろ作成する中で道具の使い方を学んだり、「もっとこういうふうにしたいから、ここを工夫しよう」などと考えることにも繋がっていくと思った。
保育参加体験をもとに討議をすることの意味	同じ保育の場面を観察していても、人によって目をつけるところは違って、そこから考えることも違うことに気付いた。 他の人の報告を聞くことで、私が見ていた場面のもとなるような場面を他の人が見ている、子どもの様子につながりを感じながら考えることができた。

表11 第13回授業内レポートからの抜粋（第2回保育参加レポートをもとにした報告と討議で学んだこと）

すきな遊びに取り組むための環境構成・援助	遊びの展開には、先生方の声かけはもちろん、友達の動きを見たり、遊び道具を新たに取り入れられたりなど、自分が注目していたこと以外にも様々なきっかけがあることを改めて学んだ。 自分の遊びたい遊びを友達に断られることもあるが、その過程によって成長することができ、大切にしているということがわかり、保育者はその過程を見守ることが大切であるように感じた。
第2回レポートをもとにした報告と討議を体験して	第1回の討議と比べて、全体的に話すことがはっきりしていて、具体的な内容が多くわかりやすかった。特に会話を「 」で示している方がわかりやすいと感じたので、実体験をレポートに書く場合は自分も取り入れたいと思った。 保育参加で同じクラスに入った人とでも見ているものが異なり、様々な視点からの意見があった。自分がその時見たり感じたりしたことも大切だし、他の人が見たこと感じたことも自分の中で考え、学びに繋げていきたい。 発表を聞いたり、レポートに書かれていることを読んだりして、私と同じように子ども理解が難しいと思っている人が何人もいて、ただ2回見ただけでは分からないことが多いと思った。昨年1年間保育ボランティアで同じクラスに関わることができたけれど、それでも理解できたとは思えなかったのが、かなり大きな課題だと思った。

3-5 今後の幼稚園教育に求められるものについて考える

第13回授業内レポートにあった「子ども理解」が「大きな課題だ」という記述（表11参照）とも関連させ、第14回では子どもの成長過程をどのように理解し記録するか、どのように評価していくかについて、平成29年告示幼稚園教育要領第1章総則第4「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」や資料（無藤，2017）をもとに解説した。その方法として期待されるドキュメンテーションやポートフォリオについても、資料（森，2015）をもとに解説した。また、幼稚園教育において育みたい資質・能力、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても解説した。この回の授業内レポートからの抜粋を表12にまとめた。

表12 第14回授業内レポートからの抜粋

子ども理解の方法について	子どもの成長に対して結果ばかりを見るのではなく、その結果になるまでの過程（プロセス）が大切であることを学んだ。そのためには、しっかりと子どもの様子を観察して記録していくべきだと考えた。
ポートフォリオについて	子ども自身が園での生活を振り返ることができるというのは考えたことがなく、保育者の振り返りや保護者・地域に向けた園だよりしか頭になかった。子どもが自分で振り返ることができるようにすることも重要だとわかった。

3-6 教材研究をもとにした模擬保育（2）

教材研究Ⅱとしてカイワレダイコンの栽培・観察・記録と観察絵本の製作を課した（表13参照）。教材としてカイワレダイコンを選んだのは、身近であり、食べる体験もでき、短期間で育ち、限られた期間の中で自宅での栽培・観察ができるためである^{注5)}。また、その体験をもとに自分なりの教材をつくることも経験できるように、観察絵本を製作することも課題とした。この課題は毎年取り入れている。

2017年度は教材研究のプロセスについて伝え合うこともできるように、さらにレポートを課した。その一部を抜粋して表14にまとめた。栽培については、自分なりに調べて試した方法について様々な記述があった。観察・記録についても、毎日時間を決めて記録する、前日との違いを探して記録する、写真を撮る、その際にズーム撮影もして細かく観察する等、様々な工夫が記述されていた。絵本の製作については、絵本の構成や見やすい絵の描き方等を事前に確認したこともあり、彩色方法等についても様々な工夫が記述されていた。擬人化したカイワレダイコンを主人公にしたり、「いちにちめ」「ふつかめ」と観察したことを子どもに伝わる表現で文章化したりと、内容にも様々な工夫が見られた。これまでの授業で学んだことを教材研究にどのようにいかしたかを記述する学生も多かった。このレポートも、印刷・冊子化して配布した。

第15回は第6回と同様の環境構成を行ない、教材研究の成果を模擬保育として発表した。「子ども」の学生たちは、教材研究Ⅰの時よりも一人一人の発表に興味をもち、楽しんで参加していた。また、同じ課題に取り組んだため、一人一人の工夫点についても理解しやすく、コメントカードの記述もより具体的になっていた。

表13 教材研究Ⅱの概要

課題	カイワレダイコンの栽培・観察をもとにした「観察絵本」の製作と読み聞かせ（模擬保育）
栽培・観察・記録	<ul style="list-style-type: none"> ・カイワレダイコンを栽培し、その過程を記録する。写真でも描画でもよい。 ・7～10日で育つ。種を植えた日からカイワレダイコンを食べるまで、毎日記録できる時期を考えて栽培する。
観察絵本の作成	<ul style="list-style-type: none"> ○写真または描画をもとに観察絵本を作成する。配布資料（ひぐち，2001）の他、図書館等にある観察絵本も参考にする。 <ul style="list-style-type: none"> ・糸とじ絵本にする。 ・材料：八つ切り画用紙、製本テープは配布する。糸、針等は各自で用意する。 ○絵本の構成を以下のように考える。 <ul style="list-style-type: none"> 表紙→最初の場面（種を植えた様子）→第2場面～（毎日育って行く様子）→最後の場面（調理して食べる様子）→裏表紙 ・見開きで1場面とする。 ・「保育内容として、どのような絵本がよいか」を考える。 ・記録をもとにラフスケッチを描く。 ・絵本の構成をよく考え、場面数を決めた上で製本する。 ・絵と文のバランスを考える。文はひらがなの手書きにする。（字が読める子どものために）
レポート	1. 栽培・観察・絵本の製作において大切にしたこと 2. 実践する上で大切にしたいこと（40字×40行 1枚）
模擬保育	教材研究の成果を模擬保育として発表する。発表をもとに討議する。

表14 教材研究Ⅱレポートからの抜粋（一部要約）

栽培・観察・絵本の製作において大切にしたこと	学生A	幼児期の子どもであればカイワレ大根の成長のどのような所に目を付けるか、子どもの視点で考えて見てみる。離れた場所から見てもはっきり見える大きさの絵を描く。文字で示したことを分かりやすく絵で表現する。
	学生B	枯らさないように毎日起きてすぐ水をあげ、最初は暗い所、伸びてきたら日光にあてる。成長の様子や気づいたことを記録し製作に活かす。子どもたちにわかりやすい言葉選びや擬人化を取り入れる。
	学生C	毎日きちんと目をかける。子どもが見やすいようにきれいな色が出るクーピーで濃く色を塗り、周りを黒ペンで縁取りした。親しみを持ちやすいように「かいわれくん」「かいわれちゃん」というキャラクターを登場させた。
	学生D	毎日同じ時間、同じ場所で写真に収めるようにしたことで、1日ずつの成長の過程だけでなく、成長の速度も正確に観察することができた。カイワレ大根全体と葉の細かい模様や様子まで観察できるように、根から葉先まで全体が写るものとズームしたものを撮影した。絵を描くのがあまり得意ではないので、丁寧な描写で子どもたちにわかりやすい絵を描けるように心がけた。
	学生E	観察は前日との大きな違いや成長段階の特徴となりそうなことを探した。絵本の内容は観察した時に率直に思ったことを子どもならどういうふうに言葉で表現するだろうかということに合わせて考えた。なるべく文章にリズムが生まれるように言葉や語順を選んだ。絵本の内容に共感したり、絵本の中の人と一緒に考えたりできるように、語りかけるような表現を用いた。
実践する上で大切にしたいこと	学生A	子どもたちが絵本の何に注目しているかや反応を見ながら読み進める。読む速さ、声の大きさに配慮する。
	学生B	3歳児クラスで絵本を読んだ時、「これ知ってるよ!」「なんでこうなるの?」と聞いてきたので、「すごいね」「不思議だね」と答えることを意識したり、場面に合わせて読むとともに楽しんでいたため、保育者自身も楽しみながら一緒に読む。
	学生C	そのときの「かいわれくん」の気持ちがみんなに伝わるように読む。絵本の見せ方にも気をつける。
	学生D	自分中心にならないようにする。全員に声が聞きとれていそうか周りの様子を確認する。
	学生E	場面に合わせ、声色を変えたり読む速さを変えたりする。語りかける文章を読む時は、聞き手の方を見たり、語りかけているように抑揚をつける。前回の模擬保育の際、みんなに見えるかを考えられていなかったので、今回はみんなに見えて、みんなに聞こえるように意識して絵本を示したり読んだりできるよう気を付ける。

表15 第15回授業内レポートからの抜粋

自分の絵本と模擬保育	自分で絵が文章を一から考えて絵本を作ることは、予想以上に難しいと実感した。
	自分も絵本を作ったことでいろんな工夫をしたので、これからいろんな絵本を見る時はどんな工夫があるか、何がいいのか、なぜそうしているのかということも考えながら見ることができそうだったと思った。
	作成に十分時間をあてたので、仕上がり自体は良いと思ったが、発表の際に緊張したのもあり、「ここを見てほしい」というところに時間をかけなかったのがもったいなかったと思った。絵本というものを伝える楽しさと難しさを感じた。
他者の絵本と模擬保育	それぞれ絵の雰囲気や色づかいに特徴があり、作った人らしさが出ることを感じた。
	自分が思いつかないような発想があったり、工夫しているところが見られ、多くの刺激がもらえたので楽しかった。
授業の中で教材研究をする意味	授業の中で教材研究をすると、保育者の立場からも子どもの立場からも保育を見ることが出来る。どんな速さで読めば子どもたちが聞きやすいか、どんな持ち方なら見やすいか、保育者として発表しているとそこまで考えられなかったが、聞く側にまわるとどのくらいが良いのか少し分かった。

この回の授業内レポートからの抜粋を表15にまとめた。時間をかけて製作した絵本については自分なりに満足しているという記述が多かったが、模擬保育については反省点を記述する学生が多かった。そのため、第16回の始めにコメントカードを渡し、授業内レポートからの抜粋も取り上げながら、2年後期「保育内容言葉」においても模擬保育を取り入れた学習をしていくことを確認した。

3-7 授業のまとめ

第16回にはこれまでの授業の流れを整理したレジユメをもとにまとめを行ない、一人ずつスピーチも行った。「少人数授業で、お互いのことを知りながらそれぞれの人の考えに触れ、自分の見方が広がった」「模擬保育も個性が見られ、自分とは違う考えに触れられた」「保育参加や教材研究は大変だったが、調べたこと体験したことをレポートに書くことで、ただ思っているよりも考えまとめ、残るのでよかった」

「他の人のレポートも読んでいかすことができるのがよかった」等、自分の考えを報告し合った。
 学んできたことを授業外レポート「私が保育内容環境で大切にしたいこと」にまとめることも課した。

3-8 授業内容の再検討と改善点～モデルカリキュラムをふまえて～

以上のような流れで取り組んだ2017年度「保育内容環境」の授業内容について、表16にまとめた保育内容「環境」の指導法のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会，2017）をふまえて再検討したい。

モデルカリキュラムの授業モデルと2017年度「保育内容環境」の授業内容を照らし合わせてみると、1)としては「森の幼稚園」の映像記録をもとに子どもと自然とのかかわりについて考えたことが挙げられる。2)としては、教材研究Ⅰ・Ⅱをもとに模擬保育をしたことが挙げられる。3)としては、附属幼稚園における保育参加をもとに「保育内容環境」について学んだことが挙げられる。7)としては、幼稚園教育要領改訂と今後の活用が期待されるドキュメンテーションやポートフォリオについて学んだことが挙げられる。

このように考えると、これらの授業内容によってモデルカリキュラムの到達目標（1）-（1）2）と（2）-（1）4）5）については達成することが期待できるが、到達目標（2）-（3）を達成する授業内容にはなっていない。幼児教育コースの学生は、幼稚園実習が3年9月から始まるため、これまでは3年前期「幼児教育基礎実習」で体験する保育参加と関連させながら保育案作成について具体的に学んできた。2年前期「保育内容環境」で学ぶ場合は、模擬保育のための教材研究レポートをさらに具体化していくことが考えられる。今後具体的にどのように学習していくかを考えたい。

授業モデルの中で取り上げることができていないのは、4）5）6）であり、モデルカリキュラムの到達

表16 保育内容「環境」の指導法（2単位）のモデルカリキュラム（一部）

一般目標と到達目標	<p>（1）領域「環境」のねらい及び内容</p> <p>一般目標 幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「環境」のねらい及び内容を理解する。</p> <p>到達目標 1) 幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本、領域「環境」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。 2) 領域「環境」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。 3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。 4) 領域「環境」に関わる周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする経験と、小学校以降の教科等とのつながりを理解している。</p>
	<p>（2）領域「環境」の指導方法及び保育の構想</p> <p>一般目標 幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。</p> <p>到達目標 1) 幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。 2) 領域「環境」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。 3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。 4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。 5) 領域「環境」の特性に応じた現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。</p>
考えられる授業モデル	<p>1) 幼児の身近な環境との関わりや教師の指導の実際に関しては、映像資料等を活用し、幼児の発達の特性や指導場面等を具体的に理解することができるようにする。 (1) - (1)、(1) - (2)、(1) - (3)</p> <p>2) 製作、栽培、伝統的な遊び等、具体的な遊びや活動を直接体験しながら学ぶ機会を設ける。 (1) - (2)、(2) - (3)、(2) - (4)</p> <p>3) 幼稚園、こども園、小学校などを実際に訪問し、領域「環境」の具体的な活動や行事の実際を理解できるようにする。 (1) - (2)、(1) - (4)</p> <p>4) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、領域「環境」と関係の深い「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」を取り上げ、幼児の発達を理解するために必要な教師の視点について、具体的な事例を基に考える。 (1) - (3)</p> <p>5) 領域「環境」との関連を踏まえ、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの具体例を取り上げる。 (1) - (4)</p> <p>6) 領域「環境」に関わる視聴覚教材などのICTや実践の具体例を示す資料を活用し、具体的な活動の在り方を理解できるようにする。 (2) - (2)</p> <p>7) 最新の学問的知見や実践例をおさえるとともに、幼児教育や発達心理学等の専門性に基づき指導する。 (2) - (5)</p> <p>* 上記授業モデルに付記した番号は、特に関連の深い到達目標の番号</p>

(保育教諭養成課程研究会，2017)

目標（１）－３）４）と（２）－２）を達成する授業内容にはなっていない。４）については、幼稚園教育要領改訂について取り上げた際に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について具体的な事例をもとに考える時間をとることができなかった。５）についても取り上げる時間を確保できなかった。小学校との接続については保育内容として取り上げる必要があり、授業内容のバランスも考えて、今後授業計画を再検討していきたい。６）についても、ICTについての資料を収集し、幼稚園における具体的な事例をもとに学ぶことができるようにしたい。学生が教材研究の中で観察のために写真撮影で様々な工夫をしていたこと等も参考にしていきたいと考えている。

おわりに

本稿では、「保育内容環境」の授業内容について振り返り、モデルカリキュラムをふまえて幼稚園教員を養成するための科目として再検討し、改善点について考えた。整理できた点をふまえて、次年度のシラバス作成や今後の新カリキュラムの構想に取り組んでいきたい。

注

- 1) 授業内レポート（A4版横1枚）には、課題レポートを左欄に、「自己評価」「質問・感想等」を右欄に記入している。「自己評価」は「授業のために事前学習をした」「授業に意欲的に取り組んだ」「授業内容について理解した」「自己課題を明確にしようとした」の4項目について5段階評価で記入し、授業者の自己評価の手がかりにもなるようにしている。レポートにはコメントをつけて次の回の冒頭に返却し、レジュメにもレポートからの抜粋をまとめ、前回の授業内容の振り返りと補足説明をした後、その回の授業を進めるようにしている。
- 2) 各々指定された時期に介護等体験実習や参加実習もあるため、自分の予定を考えて計画的に取り組めるように、第1回オリエンテーション時にその概要を伝えておき、具体的な説明も早めに実施している。
- 3) 初めての模擬保育では緊張や不安がある学生も多いため、率直なコメントを伝え合えるように、記入者名は切り取って渡している。コメントをもらうことが励みとなる経験をまずしてほしいと考えている。
- 4) 介護等体験実習、参加実習と日程が重なり、1回のみ参加となった学生もいた。
- 5) 菊地（2007）も「保育内容環境」で自宅で植物を育てる課題を取り入れており、「育てる環境が学生の心理的拠点である自宅ということもあり、植物を育てる体験は生活においても新鮮で」「それぞれの心に残る貴重な体験」になったと述べている。

引用文献

- 井口佳子：幼児期を考える―ある園の生活より―，相川書房，2004.
- 菊地恵：保育内容「環境」の授業実践記録を通しての一考察～理論と実践力の結合による保育内容の指導法を目指して（1）～，聖園学園短期大学研究紀要37，pp.73-82，2007.
- ひぐちみちこ：ひぐちみちこの手づくり絵本講座，こぐま社，2001.
- 保育教諭養成課程研究会：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究―幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える―，2017.
- 宮里暁美：生き物と出会うために，榎沢良彦・入江礼子編著，シードブック保育内容環境（第2版），建帛社，pp.88-90，2009.
- 宮里暁美：豊かな体験を支える保育者の役割，柴崎正行・戸田雅美・秋田喜代美編著，保育内容言葉，ミネルヴァ書房，pp.112-114，2010.
- 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子：3法令ハンドブック，フレーベル館，2017.
- 森眞理：子どもの育ちを共有できるアルバム ポートフォリオ入門，小学館，2016.
- 文部科学省：平成29年告示幼稚園教育要領，2017.
- 文部科学省：幼稚園教育要領解説，フレーベル館，2008.
- レイチェル・カーソン・上遠恵子 訳，センス・オブ・ワンダー，新潮社，pp.23-27，1996.